様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２３８１

研究課題名（和文）幼児や特別なニーズのある子どもへのトラウマインフォームドケア／システムの構築

研究課題名（英文）Trauma-informed care/systems for young children and children with special needs

研究代表者
野坂　祐子（NOSAKA, SACHIKO）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：２０３７９３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　乳幼児や社会的養護下の児童等、特別なニーズのある子どもへのトラウマインフォームドケア（TIC）について、乳児院及び小学校の教職員へのヒアリングと質問紙調査、小学校への継続的なフィールドワークを実施した。日常の関係性や環境等もトラウマ反応を引き起こすリマインダーになりうるため、TICの実践においてはリマインダーの把握が鍵となるが、現場の職員にとってその把握は困難と感じられていた。また、深刻な虐待やネグレクトといった子どものトラウマに関わる職員の二次受傷のなかには、乳幼児を保護する役割を担う職員自身の喪失に伴う悲嘆や葛藤も含まれ、支援者である職員への間接的トラウマの複雑性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　子どもはトラウマにさらされる潜在的リスクが高く、その実態の把握と適切な介入は喫緊の課題である。トラウマやACEsを有する子どもは稀ではなく、ACEsの影響による過覚醒や行動化によって日常生活や集団適応が困難になりやすいものの、その理解と対応は十分ではない。社会的養護を受けている乳幼児期及び児童期の子どもを対象としたTICの試みは、まだ始まったばかりであり、子どもの再トラウマと支援者の二次受傷の予防のために、早期からTICを取り入れることは社会的意義が高い実践といえる。探索的な研究であるものの、現場の教職員を対象とした継続的なフィールドワーク等からの知見は、汎用性が高いものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：　Regarding trauma informed care (TIC) for children with special needs, such as infants and children in social care, interviews and questionnaires were conducted with teaching staff at infant homes and elementary schools, and ongoing fieldwork was conducted at elementary schools. Since daily relationships and the environment can be reminders of trauma reactions, understanding reminders is key to the practice of TIC, but this was perceived as difficult for frontline staff to grasp. In addition, secondary injuries of staff involved in child trauma such as severe abuse and neglect included grief and conflict associated with the loss of the staff member's own role in protecting infants and toddlers, suggesting the complexity of indirect trauma to the staff member as a support person.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：トラウマインフォームドケア　乳児院　社会的養護

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

虐待やネグレクト、ドメスティックバイオレンス（DV）の目撃や性暴力などの被害体験は、自然災害や事故と比べてトラウマの影響が深刻化しやすく（Kessler, 1995）、早期発見と適切な介入が求められる。18 歳までの被害体験や養育者との離別や度重なる変更、養育者の精神健康上の問題や収監等は、小児期逆境体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）と呼ばれ、生涯にわたる心身の健康や社会適応等と有意に関連することが示されている（Fellite et al., 1998）。非行や逸脱、自傷行為や自殺未遂、物質依存や犯罪等に起因する要因として ACE に着目した研究が重ねられ、ACEs の影響を理解した支援の有用性が示されている（SAMHSA, 2014; Waite, 2019; Asmundson & Afifi, 2019）。

日本でも、児童虐待防止に関する法律や犯罪被害者等基本法の制定、性犯罪に関わる刑法の改正といった社会的な動きを背景に、虐待や性暴力、犯罪被害等への社会的関心の高まりがみられ、さまざまな研究から被害体験の影響の深刻さが明らかにされつつある。なかでも、子どもは幼少期からトラウマにさらされる潜在的リスクが高く、実態の把握と適切な介入は喫緊の課題とされている。トラウマや ACEs を有する子どもは稀ではなく、ACEs の影響による過覚醒や行動化によって、日常生活や集団適応が困難になりやすいものの、その理解と対応は十分ではない。

トラウマや逆境の影響をふまえ、再トラウマを防ぐための取り組みは、トラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care：TIC）と呼ばれ、専門治療にあたるトラウマケアと異なり、安全や健康を高めることを目的とした公衆衛生的アプローチとして位置づけられる。TIC は、トラウマや逆境についての基本的知識を支援者が有し、発達に及ぼす影響を考慮しながら対象者を理解し、本人の状態に合わせた対応を行うことで、再トラウマを与えうる不適切な対応を予防するものであり、医療等に限らず、生活の場で、あらゆる立場の支援者が実施できるものである。日本では精神科看護領域（川野, 2018）や児童福祉領域（野坂, 2019; 亀岡, 2020）、学校現場（大岡, 2018）での導入が報告されつつあるが、二次障害や再トラウマを防ぐためにも、より早期の介入や支援体制（Trauma Informed System）の構築が求められる。

また、子どものトラウマ反応は、多動・衝動性、集中力の低下、性的言動の増加などで表されやすいことが知られているが、生得的特性や遊びとの判別が難しく、見過ごされやすい点が懸念される。さらに、現場においては、保育や教育等の集団生活のなかで、個別の配慮と集団の規律をどう両立すればよいかという戸惑いも強い。このように、低年齢および特別なニーズのある子どもへの TIC は現場において大きな課題である。

これまでの科研調査により、子どもへの性暴力の影響を理解し、適切な支援を考えるうえで、性的トラウマだけでなく、家族機能不全を含む幼少期の逆境体験に着目する必要があること、また、施設や学校において、トラウマの理解や対応の基本は周知されつつあるが、発達障害や知的障害など特別なニーズのある子どもへの対応に苦慮しており、具体的な方策が求められていること、さらに支援者の性やトラウマに対する苦手意識や支援者自身のトラウマ体験などにより、支援者の精神健康の維持が困難な例がみられた。そのため、本研究では、幼児や障害等のある子どもへの TIC の実践と組織のあり方について検討することとする。

２．研究の目的

発達障害や知的障害など特別なニーズのある子どもの暴力被害の潜在的リスクは高く、心理教育においても子どもの反応性に合わせた工夫が必要である。よって、支援ニーズが高いにも関わらず、これまで十分に取り組まれていない幼児や障害等のある子どもへの TIC のあり方を検討することが本研究の目的である。トラウマを公衆衛生の観点から捉え、保育園・学校等の教職員が日常で行える実践とともに、トラウマや逆境体験に間接的に関与することでの支援者への二次的外傷性ストレスの把握と軽減のための体制について検討する。

３．研究の方法

本研究では、TIC の包括的な実施と評価のために、米国保健省薬物乱用精神健康サービス局（SAMHSA, 2014）が推奨し、国際的にも広く活用されている「4 つの R（Realize, Recognize, Respond, Resist re-traumatization）の鍵概念に基づくデザインをとる。

調査年度ごとに、4 つの R の各段階に着目した分析を行った。継続的な文献調査のほか、乳児院と児童養護施設、校区に児童養護施設を有する小学校、特別支援学校を調査対象とし、教職員へのヒアリング、質問紙調査、匿名化した事例の分析を行った。

４．研究成果

初年度は、TIC の 4 つの鍵概念のうち Realize と Recognize の 2 つに着目した調査を実施した。幼児を含む特別なニーズのある子どもとして、被虐待等を理由に措置された児童養護施設の入所児童に焦点をあて、9 施設の職員（129 名）への質問紙調査を行い、トラウマの影響と考えられる子どもの行動と職員自身の反応や対応について、226 の自由記述データを得た。結果、子どもが不調をきたすきっかけ（リマインダー）には、トラウマ体験に直接関連する刺激だけでな

く日常の関係性や環境が刺激として認識されており、TIC に取り組んでいる施設では、刺激の特定に努めていたが把握されにくい場合も少なくない。子どもへの対応の困難さによって、職員が自信を失ったり、子どもや職務への回避が生じたりする事例も把握された。

こうした職員の認識や対応の変化を把握するために、入所児童の在籍が多い小学校での継続的なフィールドワーク（6 回）と教職員 6 名へのヒアリング調査を実施した。教員としての経験だけではトラウマのある児童の理解は困難であり、トラウマが発達に及ぼす影響について知識を得る機会が不可欠だと感じられていた。特別支援教育は、児童理解の一側面として有用ではあるものの、特性を理解する視点だけではトラウマの影響を把握することは難しく、回答者全員が学校全体でのチーム支援と児童の包括的理解の必要性を述べていた。また、対応する職員の精神的疲弊も共通する課題として挙げられ、職員室を教員にとっての「安全基地」にする取り組みと施設との情報共有、教育・支援方針の検討と共有が図られていた。

次年度は、初年度に取り組んだ Realize のための実態調査の結果をふまえ、次の段階の Recognize と Respond に関する検討を進めた。初年度から継続的に社会的養護のもとで育つ子どもの在籍が多い小学校を対象としたフィールドワーク（計 9 回、63 時間）を行ない、トラウマをかかえる子どもの学校での行動の把握と教職員の関わりについてのデータを収集した。児童養護施設との連携状況も把握し、事例への対応のポイントと課題を抽出した。学校や施設では、顕在化した子どもの言動に着目し、それに対する介入計画が立てられやすいが、行動の背景を TIC の視点で包括的に捉えるための支援チームの共通認識が求められる。また、職員室や検討会議が教職員にとって安全な場である必要がある。

加えて、調査対象を乳児院へと拡大し、職員（24 名）へのアンケートとヒアリング調査を実施した。乳児院における TIC は、被虐待やネグレクト等による乳幼児のトラウマの影響だけでなく、一時的な保護の役割を担う職員自身の喪失に伴う悲嘆（グリーフ）や葛藤もあり、複雑な影響があることが把握された。

最終年度は、適切な対応と再トラウマの予防（Resist re-traumatization）に焦点をあてた検討を行った。継続的なフィールドワーク（計 6 回、42 時間）を行っていた小学校では、教職員を対象とした 2 回の質問紙調査と 5 回のヒアリング調査を実施した。被虐待や社会的養護の環境等による影響に関する理解度は高まっているという教職員の実感があり、異動等により教職員の知識水準や見立ての方針を共有する困難さを感じながらも、子どもを傷つけない指導の重要性は周知されていた。教職員自身の二次受傷の予防に対する認識は、とくに管理職において高く、教職員のつながりや学外の社会資源の活用が不可欠だと捉えられていた。

乳児院での職員（40 名）への TIC ワークショップと事後アンケート、ヒアリング調査では、職員間の連携について課題が挙げられた。交代勤務や感染症対策のため職員同士が話し合う構造的余裕が限られており、それが職員のストレスになっている様子がうかがえた。また、乳幼児のトラウマ反応の指標となる身体的な健康状態、食事や排せつ・睡眠等の生活習慣、職員に対するアタッチメント行動、安定した探索行動や他者との関わり等が共有されたが、措置前の生活の情報が少ないことや胎児期トラウマの影響などは知られておらず、ニーズが高い内容であった。乳幼児への再トラウマは、一部の里親養育において体罰やネグレクトとして表れうるため、措置に至る前の十分な里親支援と経過観察、トラウマの視点からのスーパービジョン等が不可欠であることが示唆された。里親措置などのフォスタリング機関でも TIC に対する関心が持たれるようになってきているが、里親への支援や措置の手続きにおいてはまだ具体的な手続きがとられているわけではなく、今後の課題といえる。

本研究が対象とした幼児や特別なニーズがある子どもは、さまざまな被害に対する脆弱性が高いが、その実態はまだ十分に把握されておらず、介入方法も未確立といえる。本研究は探索的なものを含むが、幼児への TIC について述べた研究としては新しいものであり、今後も引き続き検討していく必要がある。

なお、研究成果として、文献調査および乳児院での調査結果は、野坂祐子（2023）「保育におけるトラウマインフォームドケア：トラウマが幼児におよぼす影響と育ちを支える環境づくり」（『子ども学』, 11 号, pp.47-68.）にまとめた。小学校でのフィールドワークにもとづく報告は、野坂祐子（2023）「<education 特集>叱っても変わらない問題行動の背景に『トラウマ』、教員が知っておくべきこと：学校に必要なトラウマインフォームドケアとは」（https://toyokeizai.net/articles/-/704361）にて公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野坂祐子	４．巻 223
２．論文標題 子どものこころと性の発達	５．発行年 2022年
３．雑誌名 こころの科学	６．最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野坂祐子	４．巻 増刊 9号
２．論文標題 社会適応という自己不適応――分断を乗り越えるためのトラウマインフォームドケア	５．発行年 2022年
３．雑誌名 精神療法	６．最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野坂祐子	４．巻 54(7)
２．論文標題 発達障害におけるトラウマインフォームドケア	５．発行年 2022年
３．雑誌名 小児内科	６．最初と最後の頁 1108-1111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野坂祐子	４．巻 23（1）
２．論文標題 救いを求める思春期の怒り：トラウマによる行動化からの回復	５．発行年 2023年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 2023
2．論文標題 性的搾取に遭う若者の理解と支援の安全性	5．発行年 2023年
3．雑誌名 こころの科学 Special Issue	6．最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 11
2．論文標題 保育におけるトラウマインフォームドケア：トラウマが幼児におよぼす影響と育ちを支える環境づくり	5．発行年 2023年
3．雑誌名 子ども学	6．最初と最後の頁 47-68.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 21（4）
2．論文標題 傷つけられた子どもたちと傷つける／傷ついた社会の〈再生〉：トラウマインフォームドケアの視点	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 428-433
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 219
2．論文標題 デートDVにみる支援と社会の課題：個別支援からコミュニティへの介入へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 こころの科学	6．最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 62（3）
2．論文標題 トラウマインフォームドケア ： 子ども・支援者・組織の再トラウマを防ぐ公衆衛生のアプローチ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6．最初と最後の頁 344-349
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 132（11）
2．論文標題 司法矯正領域におけるトラウマインフォームドケア：対象者・支援者・組織の再トラウマを防ぐアプローチ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 刑政	6．最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 64
2．論文標題 デートDVとは何か：被害者・加害者への介入	5．発行年 2022年
3．雑誌名 保健の科学	6．最初と最後の頁 90-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 23
2．論文標題 「あなたはひとりじゃない」から「あなたはひとりでいい」への転換―SNS・関係性依存	5．発行年 2023年
3．雑誌名 臨床心理学135	6．最初と最後の頁 307-311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 64
2．論文標題 施設における子どもの性と包括的性教育―トラウマインフォームドケアの視点から―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6．最初と最後の頁 215-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 12
2．論文標題 トラウマをかかえる子どもに気付く視点――保育におけるトラウマインフォームドケア	5．発行年 2021年
3．雑誌名 保育ナビ	6．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子，菊池美奈子	4．巻 72(13)
2．論文標題 保健室から見える子どものSOS	5．発行年 2021年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池美奈子，野坂祐子	4．巻 72(15)
2．論文標題 子どものSOSをキャッチする――トラウマのメガネを使ってみよう	5．発行年 2021年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子，菊池美奈子	4．巻 72(17)
2．論文標題 子どもの性の発達と支援	5．発行年 2021年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池美奈子，野坂祐子	4．巻 73(1)
2．論文標題 子どもの性にかかわる行動を理解する	5．発行年 2022年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子，菊池美奈子	4．巻 73(2)
2．論文標題 性被害を受けた子どもの理解とケア	5．発行年 2022年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池美奈子，野坂祐子	4．巻 73(4)
2．論文標題 トラウマを抱えた子どもの学校生活とケア	5．発行年 2022年
3．雑誌名 健康教室	6．最初と最後の頁 56-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 49(1)
2．論文標題 子どものメンタルヘルス ～トラウマインフォームドケアの視点から	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日精診ジャーナル	6．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 1323
2．論文標題 小学生の性被害の特徴	5．発行年 2023年
3．雑誌名 小学保健ニュース	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 1326
2．論文標題 性被害が子どもに与える影響	5．発行年 2023年
3．雑誌名 小学保健ニュース	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 1329
2．論文標題 性被害を受けた児童への支援	5．発行年 2023年
3．雑誌名 小学保健ニュース	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 1332
2．論文標題 性被害の予防と安全な学校づくり	5．発行年 2023年
3．雑誌名 小学保健ニュース	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 5月号
2．論文標題 こころの傷を理解した保育　①子どものトラウマに気づくために	5．発行年 2023年
3．雑誌名 真宗	6．最初と最後の頁 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野坂祐子	4．巻 6月号
2．論文標題 こころの傷を理解した保育　②「トラウマのメガネ」で子どもの状態を理解する	5．発行年 2023年
3．雑誌名 真宗	6．最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 野坂祐子
2．発表標題 子どもへの性暴力：被害‐加害への介入と支援の充実に向けて
3．学会等名 第21回日本トラウマティック・ストレス学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 野坂祐子
２．発表標題 児童福祉領域におけるTICの実践と課題
３．学会等名 第20回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野坂祐子
２．発表標題 被害者と支援者の安全を高める――トラウマインフォームドケア
３．学会等名 第35回日本助産学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野坂祐子
２．発表標題 加害者の「被害体験」と「被害者の理解」をいかにつなげるか ～トラウマインフォームドな司法に向けて
３．学会等名 第22回日本トラウマティック・ストレス学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 野坂祐子
２．発表標題 トラウマインフォームドケアからみる児童・思春期の自傷・他害
３．学会等名 日本犯罪心理学会第61回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 野坂祐子
２．発表標題 トラウマインフォームドケアを活用した支援者・組織の安心安全を高める実践
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第29回学術集会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計10件

１．著者名 野坂祐子，菊池美奈子	４．発行年 2022年
２．出版社 東山書房	５．総ページ数 229
３．書名 保健室から始めるトラウマインフォームドケア：子どもの性の課題と支援	

１．著者名 野坂祐子，　浅野恭子	４．発行年 2022年
２．出版社 日本評論社	５．総ページ数 176
３．書名 性をはぐくむ親子の対話 ： この子がおとなになるまでに	

１．著者名 宮地尚子	４．発行年 2021年
２．出版社 日本評論社	５．総ページ数 240
３．書名 環状島へようこそ　トラウマのポリフォニー	

1．著者名 小木曽 宏	4．発行年 2022年
2．出版社 生活書院	5．総ページ数 272
3．書名 児童福祉施設における性的問題対応ハンドブック	

1．著者名 栗本英世、モハーチ・ゲルゲイ、山田一憲、小野田正利、綿村英一郎、山本晃輔、木村友美、宮前良平、野坂祐子、白川千尋	4．発行年 2022年
2．出版社 大阪大学出版会	5．総ページ数 222
3．書名 争う	

1．著者名 野坂祐子，浅野恭子	4．発行年 2023年
2．出版社 誠信書房	5．総ページ数 172
3．書名 My step マイステップ――性被害を受けた子どもと支援者のための心理教育　改訂版	

1．著者名 藤岡淳子，野坂祐子，毛利真弓	4．発行年 2023年
2．出版社 誠信書房	5．総ページ数 238
3．書名 性問題行動のある子どもへの対応――治療教育の現場から	

１．著者名 佐久間路子，福丸由佳	４．発行年 2021年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 160
３．書名 子ども家庭支援の心理学	

１．著者名 相澤仁	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 232
３．書名 みんなで育てる家庭養護⑥ 中途からの養育・支援の実際――子どもの行動の理解と対応	

１．著者名 浅井春夫	４．発行年 2023年
２．出版社 大月書店	５．総ページ数 160
３．書名 Q&A 多様な性・トランスジェンダー・包括的性教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

子どもの性の健康研究会
http://csh-lab.com/
大阪大学大学院人間科学研究科 教育心理学研究室
https://kyoshin.hus.osaka-u.ac.jp/
子どもの性の健康研究会
http://csh-lab.com/
大阪大学大学院人間科学研究科 教育心理学研究室
https://kyoshin.hus.osaka-u.ac.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関